

パリ通信・第148号

オルセー美術館「パリ1874年」展

4月に入り「復活祭の学期休み」が始まり晴れて気持ち良い季節になった。印象派絵画の誕生を告げる1874年から150周年を記念し、オルセー美術館で「パリ1874年」展(2024年3月26日から7月14日まで)が始まった。

今から150年前の1874年4月15日第1回「印象派展」がパリで開催された。モネ、ルノワール、ドガ、モリゾー、ピサロ、セザンヌ、シスレーらが集まり、写真家ナダールの旧アトリエ(35番地 Boulevard des Capucines)を借りて各自作品を持ち込み販売するという新しい形態の作品展である。

明るい光に満ちた絵画、瞬時に変化し移りゆくモチーフを素早いタッチで捉えようとする新しい芸術家たちの新しい絵画が生まれる春となった。当時のサロン、絵画展ではボザールの審査員が出展作品を審査し、神話や歴史的事実をテーマにアトリエで入念に描かれた伝統的な絵画が評価され、当選した作品には賞が与えられた。

こうした権威的でアカデミックは王道を離れた形でクロード・モネ、オーギュスト・ルノワール、カミーユ・ピサロが新しい組合形式の会社組織を結成し、サロンや公式展示のシステムを必要としない自由参加の展示を始めたのである。現在「印象派」として高く評価される画家たちも当時は少数派であり、評価は低く作品はほとんど売れず、ナダールのアトリエ賃貸料さえも支払えない赤字で終わり、「印象派」という名称は軽蔑的な意味で使われたのだった。



1870年にオーストリア帝国との「晋仏戦争」で疲弊したパリ、1871年にはパリ・コンミュンでパリは破壊された。1871年から県知事オスマン男爵によってパリ大改造が始まる。大通りが整備され、駅が造られ、公園などの緑地が生まれ、1873年の火災で消失した旧オペラ座(ル・ペルチエ通り12番地)に代わり、現在のオペラ座(ガルニエ)が文化の象徴として建造された。大都市計画による新しいパリの誕生である。



ブルジョワ層が急速に台頭するこの時代、画家たちに求められるものも彼らの豊かな生活、近代化された風景であり、印象派の画家たちの明るい生き生きとした絵画は新しい時代の到来とともに生き、反映することになる。1860年代から

コロ、クールベ、ドービニー、ヨンキント、ブーダンと言った彼らの先駆者たちが開いた道でもあった。

1874年4月15日から5月15日までの1ヶ月間の作品展は、審査員の選別もなく、31名が各自の判断で持ち込んだ計約200点の作品を販売目的に展示するというこれまでにない形態で行われたのである。11月のル・アーヴル港に昇るクロード・モネ「印象、①日の出」(1872年作)、②「けしの花」(1873年)を始め、③オーギュスト・ルノワール「パリジエンヌ」(1874年)、④エドワール・マネ

「鉄道」(1873年)、⑤ベルト・モリゾー「かくれんぼ」(1873年)など近代化された街で展開される新しいブルジョワ層の生活風景、モードや風俗、建造物が描かれている。

20世紀になるまで彼らの作品は評価されず、フランス国内より先にアメリカやイギリスで価値が認められる結果となった。

1874年から始まる彼らの作品展は1886年まで続き、76年、77年、79年、80年、81年、82年、86年の8回が実施された。経済的に報われない彼らを支えたのがギュスターヴ・カイユボットで作品展の費用を提供し、メセナを集め、作品購入を続け経済支援を行う。海外に売られていく作品が多い中、カイユボットが購入し国に寄贈したお陰で多くの優れた作品がフランス国内に留まることになる。交友関係で結ばれ、特別なマニフェストを掲げない印象派の画家たちは作品展の回数を重ねるに従い、セザンヌは色や光よりも構図や抽象性へと向かったように、夫々が進む道を選び印象派展は自然解体する。ただ一人カミーユ・ピサロだけが全回に出展した。

今や世界中が絶賛する印象派だが、同時代の人々の関心は薄く時間差を以って評価されたことは今私たちの時代にも充分にあり得ることだろう。生きている時代の価値を見つけることは本当に難しいと思う。

